

本草綱目

中国、明末の博物学者・医師である李時珍が古今の本草書を集大成した薬物書。52巻。1578年完成、李時珍の没後その子李建元により1596年に刊行。中国では薬物のことを古くから本草(「薬の本(もと)となる草」ということから)と呼び、多くの本草書が伝えられたが、李時珍の時代になると薬物の基準を決めるのに「証類本草」(1082年ごろ成立)では実情にそぐわない点が生じてきた。その欠陥を克服して成功したのが「本草綱目」である。

本書は800に近い文献を引用し、李時珍の観察・見解を加えてまとめている。この書の注釈や研究も多く、中国や日本において最も影響の大きかった本草書である。日本には幕府の儒官・林羅山が徳川家康に献上(1607)、この後、日本の本草学が発展した。近年中国では、過去における最も偉大な薬物書として尊ばれている。

- 1・2巻 : 序列(総論)
- 3・4巻 : 百病主治(症例ごとの有効薬)
- 5巻以降 : 各論 1892種の薬物を、無機物(水・火・土・金石の4部)、植物性(草穀・菜・果・木・服器の6部)、動物性(虫・鱗・介・禽・獸・人の6部)の16部、さらに細分し60に分類して解説。各薬品については、釈名(名称の由来を示す)・集解(産地・形態などを説明)・正誤(旧説の誤謬の批判)・修治(生薬の調整法)・気味(性質を表す)・主治(薬効を表す)・發明(主治の理論的説明)・附方(応用)の8目に分け解説。

当館の所蔵本は、正徳4年(1714)刊行。校閲者は稻生若水(本草学者)

「本草綱目」52巻ほか、以下4著作を同時刊行している。

- 脈学奇経 1冊 (李時珍の著作)
- 別集 4巻 1冊 (若水の著作)
- 図翼 4巻 2冊 (若水の訂補図)
- 図経 乾坤 2冊 (図)

